

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 2 号について
平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 2 号を発表したので送付します。

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	いもち病 イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ		2 2 2
冬春キュウリ (半促成栽培)	べと病 うどんこ病 褐斑病 ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類 キュウリ黄化えそ病 (MYSV)	やや少 やや少 やや少 並 並 -	2 2 2 3 3 3
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 ミナミキイロアザミウマ 黒枯病 (仮称)	少 並 やや少 -	3 3 3 4
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 コナジラミ類 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 並 少	4 4 4 4
冬春イチゴ	ハダニ類	並	5
カンキツ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 やや多	5 5 5
チャ	カンザワハダニ	並	5

作物の生育状況 (3月中旬)

早期水稲は育苗期、冬春キュウリの半促成栽培は定植直後、冬春ピーマン・冬春トマト・冬春イチゴは収穫期であった。

4月の気象予報

平年に比べて晴れの日が多く、気温は平年並か低い、降水量は平年並、日照時間は平年並か多いと予想されています。(1か月予報 鹿児島地方気象台 3月18日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稻

1. いもち病

[防除上の注意]

- 1) 補植用の置き苗は、いもち病の発生源となるので早めに処分する。

2. イネミズゾウムシ

[防除上の注意]

- 1) イネミズゾウムシに効果のある育苗箱施薬剤を使用していない水田では、発生が目立ち始めたら（10株当たり成虫数5頭）直ちに粒剤の水面施用を行う。

3. スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

- 1) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- 2) 田植後2～3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- 3) 貝の生息が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

冬春キュウリ (半促成栽培)

1. べと病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 1か月予報では、降水量は平年並、日照時間は平年並か平年より多いと予想されている

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2. うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3. 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。

- 2) 1か月予報では、気温は平年並か平年より低い、降水量は平年並、日照時間は平年並か平年より多いと予想されている

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

4. ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では8ほ場中3ほ場で発生が確認されたが、いずれ葉当り虫数0.5頭の微発生で平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

5. コナジラミ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

6. キュウリ黄化えそ病

病害虫発生予察特殊報第2号(平成17年3月17日発表)参照

[防除上の注意]

- 1) 発病株は伝染源となるので、直ちに抜き取りほ場外に持ち出し埋没処分するか、ビニル袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- 2) アザミウマ類(主としてミナミキイロアザミウマ)によって媒介されるので、施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
- 3) 青色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。
- 4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農業改良普及センターまたは病害虫防除所に連絡する。

冬春ピーマン

1. うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の発生面積率40.0%(平年45.2%)は平年並、発病葉率6.9%(平年3.7%)は平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

2. 斑点病 (少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後では防除効果が上がりにくいので、予防散布を行う。

3. ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の発生面積率20.0%(平年38.4%)は平年並、10花当り寄生虫数0.2頭(平年1.7頭)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

4 . 黒枯病 (仮称)

[防除上の注意]

- 1) 3月中旬の巡回調査ほ場では発生面積20.0%(前月30.0%)、発病葉率0.3%(前月0.9%)である。
- 2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。
- 4) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- 5) 同一薬剤の連用は、薬剤耐性菌の発生を招く恐れがあるので避ける。

冬春トマト

1 . 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の発生面積率20.0%(平年18.0%)、発病葉率2.0%(平年1.4%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 . 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) ハウスの換気に努めるとともに、曇雨天日に防除する場合はくん煙剤を使用する等、ハウス内の湿度が高くないようにする。
- 2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- 3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 . コナジラミ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の発生面積率30.0%(平年51.4%)、百葉当たり虫数1.3頭(平年10.8頭)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) シルバーリーフコナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介するので、後述の「4. トマト黄化葉巻病(TYLCV)」を参考に防除する。
- 2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 . トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1. ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

1) 3月中旬の発生面積率41.6%(平成52.2%)は平成並、寄生株率12.1%(平成15.3%)は平成よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

カンキツ

1. そうか病 (並)

[予報の根拠]

1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生未確認である。

[防除上の注意]

1) 重点防除時期は、萌芽期・落花期・梅雨期である。

2. かいよう病 (並)

1) 3月中旬の中晩柑における越冬葉調査では、発生面積率60.0%(平成21.1%)発病葉率8.8%(平成3.3%)は平成並である。

[防除上の注意]

1) 防除は予防散布が原則であり、防除適期は萌芽前(3月中下旬)・開花直前・花弁落下後・秋芽生育期である。

3. ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

1) 3月中旬の発生面積率37.0%(平成37.3%)、寄生葉率13.3%(平成7.5%)は平成よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 本虫の要防除水準は寄生葉率30%あるいは10葉当たり寄生虫数5~10頭となっている。特に冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では発生状況に注意し、要防除水準に達する前の発生初期に防除する。
- 2) 同一薬剤及び同一系統薬剤の使用は年1回が望ましい。

チャ

1. カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

1) 3月中旬の摘採面における発生面積率60.0%(平成49.7%)、寄生葉率5.2%(平成5.0%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 一番茶萌芽期の防除は、発生が多くやむを得ない場合のみとする。
- 2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20% の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10% の度数の入る幅
（平年値は過去 10 年間の平均）

4 予察情報の種類

病害虫防除所から発表する情報は次の 5 つです。

- 1) 予 報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- 2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。（従来の防除速報にあたる）

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】 病害虫防除所 櫛間 TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499 E-mail : kushima-yoshiyuki @pref.miyazaki.lg.jp
